

あんこいっぱいのもんじゅう石

昔々、野辺地の町のあちこちを、
「あんこいっぱい入ったまんじゅう買いませんか」
「あんこいっぱいのもんじゅういりませんか」
と大きな箱を背負ってまんじゅうを売り歩く女の人がありました。
まんじゅう売りの声が聞こえると子供達やお爺さんやお婆さんもお母さんも
「美味しいまんじゅう売ってください」
「あんこいっぱいのもんじゅうください。」
と家から出て来て買ってくれました。いつも、まんじゅうは売り切れになり、
「明日また来ます。あんこいっぱい入れて作って来ますから買って下さい」
と言って、まんじゅう売りが軽くなった箱を背負って帰って行きました。

雪のちらつく寒い日
「あんこいっぱいのもんじゅういりませんか」
「まんじゅう、買いませんか」
とまんじゅう売りは声を張り上げましたが、戸を開けて雪の中へ出でくる人はいませんでした。
金沢、本町、下町と回っても1つ、2つ売れるだけでした。
袋町、新町、八幡町、馬門と売り歩きましたが、3つ、4つ売れただけでした。
「あんこいっぱいのもんじゅう、買いませんか。」
「ごめん下さい。まんじゅう買いませんか。」
と一軒、一軒回って声を掛けてみました。
浜町から田名部道へと風も強くなり、雪も吹き付けてきました。
木明から有戸と回る頃には日も暮れて吹雪になっていました。
「ごめん下さい。あんこいっぱい入ったまんじゅういりませんか。」
と家々を回りました。
「こんな吹雪に家へ戻るのですか。暗い吹雪に歩くのは危ないですよ。ここに泊まって、朝帰ったら」
と言ってくれましたが、まんじゅう売りは、
「ありがとうございます。でも、家には子供達が待っていますから、泊まっていられませんか」
と言うと残りのまんじゅうを背負って吹雪の中に出て行きました。吹雪の夜道を町に戻るまんじゅう売りの姿は、あつという間に見えなくなりました。
次の日は、吹雪がやみ青空になりました。有戸の人達は、まんじゅう売りが無事に家に帰ったか心配していましたが、まんじゅう売りが帰っていないと噂が町に広まっていた。

そこで、有戸の人達は、まんじゅう売りを探して、道路やその辺りを探しましたが、見つかりませんでした。

いつしか、まんじゅう売りのことを話すこともなくなりました。

あれから何年もの年月が過ぎ、木明の干草橋から淋代へ行く途中に、白い石がころころと川底を転がっている「まんじゅう流れ」と呼ばれるところがありました。白い石を割って見ると中は、あんこ色でまんじゅうのようでした。

その石を拾った人は、まんじゅう売りが残ったまんじゅうを子供に食べさせたくて、背負って帰ったまんじゅうが石になったのだと思いました。

子供を慕う母親の気持ちがまんじゅうを石にしてしまったのでした。

どっとはらい